

---

# 小僧の豆腐

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小僧の豆腐

### 【Nコード】

N13620

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

昭和の頃の大阪で話題になっていることがあった。雨の日に一人の小僧が豆腐を勧めてくるという。その豆腐を食べると。こんな妖怪もいたりします。

## 第一章

### 小僧の豆腐

大阪で一つ噂になっていたことがあった。

それが何かというのだ。豆腐であった。

雨の日に街を歩いているとだ。そこに小僧が出て来るのだ。そしてその手に持っている豆腐を差し出すというのだ。皿の上に乗ったその豆腐をである。

そうした噂が広まっていた。思えば変わった噂であった。

「豆腐かいな」

「そや、豆腐や」

難波の食堂であれこれと話していた。サラリーマンの二人が洋食を食べながら話をしている。丁度梅雨時でじめじめした雰囲気の中で話をしている。

そのうちの眼鏡の男がだ。エビフライ定食を食べながら言うのである。

「豆腐を差し出してくるらしいわ」

「豆腐をねえ」

オールバックの男はそれを聞いていぶかしむ顔になった。その顔でカレーを食べている。見ればそのカレーは御飯の中にまぶしてある。

「何で豆腐やねん」

「それは僕も知らんわ」

眼鏡の男は首を横に振って答えた。

「何でかはな」

「豆腐屋の宣伝とかか？」

「それやったらもつと他にやり方あるやろ」

眼鏡の男はこうオールバックの男に返した。

「佐川君、君やったらどうする？」

「どうするってか」

「そや。君やったらこの場合どうする？」

「オールバックの男の名前を出しての問いであった。」

「この場合は」

「そやな。自分の店の前で食うてもらうな」

佐川はカレーを食べる手を少し止めてこう答えた。カレーには卵が入っていてソースも混ぜているのか少し黒い。それをかき混ぜて食べているのだ。店の中は木の壁で結構狭い。しかしその狭い中に客が結構入っている。そうした場所である。

「それが一番やろ、安倍川君」

「そやろ、僕かてそうするわ」

佐川も安倍川というその眼鏡の彼の言葉に頷いた。

「やっぱりな」

「おかしな奴やな、その小僧は」

「ああ。問題はその小僧が何者かちゆうことや」

佐川は首を傾げさせながらそのことを問うた。

「それやな、肝心なのは」

「悪ガキやるか」

「まあ豆腐に毒とかは入ってへんやろ」

佐川はそれはないと見ていた。

「流石にな」

「そやな。それは流石にないやろ」

安倍川も佐川の今の言葉には頷いた。

「そこまで悪質やとは思えへんわ」

「そやな、ほなちよっとその豆腐食べてみるか」

「食べるんかいな」

「おもしろいか？それって」

笑いながらの言葉だった。

「それもな。おもしろいやろ」

「まあそやな。実際に何で豆腐持って街におるかわからんしな」

「会つたら食べてみるわ。絶対にな」

こんな話をしていた。そのうえで雨の大阪の中にいた。そして佐川はその雨の仲のある日にだ。仕事帰りの難波で一杯引っかけていた。

夜の雨の難波も風情がある。法善寺横丁では石の道も塗れて端から入るネオンの光がその道の水溜りに映されている。そして道行く人々も傘をさして行き交っている。彼はその中で馴染みの店に行こうと思つたのである。

安いが美味しい店だ。しかし場所が今一つで人気のあまりない横丁を抜けなければならぬ。穴場だがそこそこ人気もある店だ。

そこに行くことにした。そうしての人気のない横丁を進むとだつた。店の建物の裏手のところを通っていたがそこで声をかけられたのである。

「なあおつちゃん」

「んっ？」

小僧の声だつた。それに反応する。

声が出た方を見るとそこに小柄な小僧がいた。頭は丸坊主で紺に白い小さな模様のある着物を着ている。足は下駄でやけに人なつっこい顔をしている。その小僧が声をかけてきたのだ。

そしてその手にあるのは。白い豆腐であつた。それを差し出しながら彼に言ってきたのである。

「これ食べへん？」

「豆腐？」

「うん、豆腐や」

その人なつっこい顔での言葉だつた。

「それやで」

「何でそんな豆腐を持つてるんや？」

噂には聞いていた。その豆腐を勧めてくる小僧はだ。安倍川との話も思い出していた。しかしこうして実際に会ってみると余計にわからなかつた。

## 第二章

「美味そうな豆腐やけれどな」

「おいらのお店の残りなんや」

小僧はこう言うのだった。

「よかつたら食べてや。美味いで」

「いたんでたりとかはないやろな」

一応念の為にそれを聞くのだった。

「毒とかな。まさか思うけれど」

「毒入れたのなんか食わせたら人殺しになるやろが」

小僧の方からそれは否定してきた。

「そやからそれはないわ」

「ないか」

「そや、それはないわ」

こう言うのだった。

「そんなのしたら一発で鬼太郎が来るわい」

「鬼太郎？」

小僧が出した名前にいぶかしむ顔になる。店の裏手のすすけた通りは夜ということを差し引いてもうらびれたものだった。ゴミ箱がありその周りでは野良猫達が集まって寝ている。鼠もあちこちに見える。しかし人はいない。そんな場所だ。

そうした場所で小僧と話してだ。今その名前を聞いたのである。

それで問うたのだ。その名前のことをだ。

「誰やそれ。変わった名前やな」

「又三郎の親戚やと思ってくれたらええわ」

「又三郎？ああ、あれか」

佐川にもそれが誰なのかはわかった。

「風の又三郎かいな。あの童話の」

「ええ奴やで」

小僧は何故かその又三郎を知っているようだった。

「まあ東北やから滅多に会えへんけれどな」

「そうなんか」

「まあわしは悪いことはせんで」

小僧はあらためてこう言ってきた。

「それは安心してや」

「安心してええんやな」

「そやから悪いことしたら鬼太郎に懲らしめられるんや」

またこの名前を出すのである。

「それにわしもそんなことは好かん。だからせんから」

「そうなんか」

「そや。そやからこの豆腐安心して食べや」

こう言うのであった。

「美味しいで。それもごつつうな」

「ごつつうか」

「人のそれとは作り方がちやうから」

何気に気になる言葉を出している。しかし佐川は小僧の今の言葉には気付かなかった。そしてそのまま話を聞くのであった。気付かないままである。

「そやから食べてや」

「ああ、わかつたで」

ここで遂に頷いた彼だった。そうしてだ。

今も差し出しているその豆腐の皿を手を取った。小僧はすかさず箸を出してきた。思ったよりも気が利く小僧だった。そしてそれを食べるのだった。

その豆腐は確かに美味かった。まるやかでありしかも味がしつかりしている。小僧の言葉通り彼がこれまでに食べたこともない美味しい豆腐だった。

満足できた。見事な味である。佐川はそれを食べ終えてそうして言うのだった。

「美味かつたわ」

「そやる、美味かつたやる」

「ああ、こんな美味い豆腐はそうはないわ」  
満足しきつた顔での言葉である。

「ほんまにな」

「また何処かで会つたらその時も食べてや」

小僧はそんな彼に対してにこにことして言ってきた。無邪気な笑顔である。

「その時にな」

「ああ、またその時にな」

「食べてや。ほなまたな」

こう言つて小僧は姿を消した。傍の店の裏口に入つてそうしてである。彼は姿を消してしまった。後に残つた佐川はそのまま意気揚々と馴染みの店に入った。

小奇麗な店である。小さいが清潔であり古い建築であるがそれでもしっかりとしている店だった。店のおかみも小柄で奇麗な格好である。親父もだ。

狭い店に何人が客がいる。彼等は静かに酒を飲んでいる。佐川も彼等の中に入った。



### 第三章

そしてそのまま飲んでいるとだ。不意に客の一人が驚いた声で彼に言ってきた。

「お、おいあんた」

「何や？」

「その顔どないしたんや!？」

彼の顔を指差しての言葉だった。

「何でそんなの付けてるんや」

「そんなのって？」

「うわ、増えたで」

「ほんまや、何やそれ」

「顔だけやないし」

「あちこちに出てるやないか!」

他の客達も次々に言う。佐川もその言葉にいぶかしんだ。

そしてである。ふとその手を見るとであった。

何とカビが生えていた。アオカビである。しかも見るそばから増えてきている。

それを見てだ。彼も驚きを隠せなかった。

「な、何やこれ!」

「何やこれちやうわ!」

「どないしたんや一体!」

「どういいう病気や!」

「こつちが聞きたいわ!」

佐川の方もこう言う。

「どういいうことやねん!」

「そんなこと知るか!」

「それよりもそのカビ何とかせい!」

「とりあえず店出るんや!店の中までカビだらけになるやろ!」

「って言ってるそばから繁殖しとるやないか！」

こうしてであった。彼はカビだらけになりその日は店どころではなかった。その後風呂でカビを取ることに必死になる破目になったのである。

そして後日。彼はこのことを安倍川に話した。またあの店においてだ。

今日は二人で同じものを食べていた。カレーである。御飯とルーを一緒にまぶしその上に卵を入れている。そこにソースを注いで食べながらだった。

安倍川がだ。こう言ってきたのだった。

「それ妖怪やな」

「妖怪かいな」

「ああ、その話聞いて思い出したわ」

そのカレーを食べながら自分の向かい側の席に座る佐川に対して言うのであった。

「それ豆腐小僧っていうんや」

「豆腐小僧!？」

「そついう妖怪もおつてな」

こう佐川に話していく。

「雨の日に出て来て姿は子供でな」

「わしが見たまんまやな」

「それで豆腐を差し出してくるんや」

ここまで一緒だった。

「それで食べるように勧めてくるんや」

「何かそれも一緒やな」

「そやるな。話聞いてもまんまや」

「ほなその豆腐食うたらかいな」

「カビだらけになつたやろ」

全て一緒であった。何もかもがだ。

「そこまで聞いて完全に思い出したんや」

「そうやったんか。あれ妖怪やったんか」

「カビだらけになって大変やったみたいやな」

「まだ身体中むず痒い気がするわ」

苦笑いで言葉だ。

「インキンとかタムシとかになった気分や」

「それと水虫かいな」

「海軍さんみたいにな」

インキンと水虫は海軍には付き物である。このことに関しては陸軍よりも苦労しているかも知れない。とにかく海軍といえばインキンと水虫である。

「それになるかと思うたわ」

「けれどそれはならんかったんや」

「すぐに身体洗ったからな」

それで大丈夫だったというのである。

「ことなきを得たわ」

「それが不幸中の幸いやったな」

「ほんまや。まあとにかくや」

ここでほっとした顔になった佐川だった。

「もうあの小僧に会っても豆腐は食わんで」

「絶対にやな」

「ああ、もうあの豆腐は食わん」

また言う彼だった。

「懲りたわ、ほんま」

「夕子の悪い悪戯やな」

安倍川は少し楽しげに笑いながらこんなことを述べた。

「そんな豆腐出して来るなんてな」

「そやな。妖怪つてそうやねんな」

「ああ、まあ人を食うような妖怪やなくてそれは何よりやないか」

「それもそうか。命があつてこう話せるだけでもええことやな」

そのことは素直に喜ぶ佐川だった。彼は笑いながらカレーを食べ

ていた。外の雨は次第に止んできて晴れようとしていた。梅雨の大  
阪の少し度が過ぎた悪戯であった。

小僧の豆腐

完

2010・4・30

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1362o/>

---

小僧の豆腐

2010年10月8日12時12分発行